

三才騎勢

安田

二ノ騎将

安田 武

合同出版



安田 武（やすだ たけし）

大正11年生れ。法政大学国文科中退。

思想の科学研究会会員，日本戦没学生記念会常任理事。

主著：『戦争体験』未来社，『戦争文学論』勁草書房，

『学徒出陣』三省堂新書，『人間の再建』筑摩書房，

『遊びの論』永田書房，『芸と美の伝承』毎日新聞社。

現住所：東京都保谷市東町三ノ七ノ二

いっくら驕れる

一九七二年七月二十日第一刷発行

著 者 〓 安田 武

発行者 〓 宮原敏夫

発行所 〓 合同出版

101

東京都千代田区神田神保町一ノ五二

電話・東京03（294）三五〇六

振替・東京六五四二二

印刷 〓 三報社

製本 〓 大和工業

■ 御請求あり次第総目録送呈いたします
■ 落丁乱丁のさいはお取換えいたします

こころ驕れる||目次

愛の畢り

失われし時を求めて 7

妻との別れ 39

死にはぐれて

青春の廃墟 73

転向研究会のなかで 125

一期一会

坂口安吾への姿勢 173

梅崎春生と私 182

三島由紀夫のなかの戦争不在 187

祇園と高橋和巳 194

武田泰淳の『滅亡について』 203

安岡章太郎との逢い方 209

金子光晴の複雑な芯 213

清水幾太郎のこと 217

桑原武夫の人と思想 224

わだつみ像と末川博 227

あとがきにかえて

私とは人びととの関係の総和である

装帧||林
静一

愛の 畢り

失われし時を求めて

—昭和十六年十二月八日—

上総湊海岸

夏が近づいて来る頃、竹内好と一緒に呑んでいると、今年もまた上総湊かね、と初手から呆れ返ったような、半ば軽蔑したような顔つきで念を押される。ハア、とだけ応える。「頑固だからネ、この人は——」と、竹内が苦笑する。竹内好から、頑固者の烙印を押されれば、まずは一丁前と秘かに私は思う。

子供の頃から、おなじ房総海岸でも、御宿とか勝浦といった外房の方に昵みの深かった私が、昭和十五年夏、はじめて内房の上総湊を訪ねたのは、まったくの偶然に過ぎない。その夏休み、自ら望んで何処へも行かず、むしろ行くことを拒んでいたのにも、ちょっとした事情が絡んでいた。だが、そのことは、いまでもいい。酷暑の東京に居直るような心づもりで、自棄糞な読書三昧に明け暮れているうち、流石にいささかうんざりして来た。水平線の彼方に輝く夏雲の光、

その光眩ゆい蒼空を音もなく飛び交う鳶の群れ、うち砕ける波の飛沫と共に吹きつける磯臭い潮風のそよぎ、灼けつくような砂、砂浜から波打際を埋めた若い男女の裸身、潮騒に交響する彼等の甲高い叫び、笑い声——。読書に疲れた脳裡に、そんな光景がとりとめもなく駆け廻る。華やかに遊び呆けているにちがいない友人たち誰彼の顔が泛ぶ。折りも折り、小学校以来の友人から一葉の絵葉書が送りつけられて来た。上総湊への誘いであった。ほんの四、五日息を抜くつもりで、私は旅装も簡単に、友人を訪ねていった。これが発端である。

炎熱の都会で、想像していたとおりの爽やかな海辺の風景が、今年も打開けていた。そればかりではない。小田千人の妹千夜子から、同級生だと数寄屋昌子を紹介されたのだった。四、五日どころの騒ぎではなくなった。いや、何故、夏の始め、小田に誘われた時に素直に来なかったのか、と自らの頑な心を後悔しさえもしたのである。街を抜けて行く時、「さア、今朝も元気に体操しましょう」というラジオ体操の音が流れてくる、朝やけの海辺をさまよいながら、ひょっとしたら、数寄屋昌子も海の太陽を見にやってくるのではないか、と秘かな期待に胸がときめく。漁師の家や街の商店の座敷を借りた避暑客の、夕食後の団欒の姿が、すだれ越しに見透かされる夜の散歩で、ぼったり数寄屋昌子にゆき逢いはせぬか、と心が踊る。実際、そういう偶然が一度だけあったのだ。駅前から左へ、土地の人たちが分譲地と呼んでいる、小さな別荘地帯へ抜けてゆく田甫の道で、小田や千夜子と連れ立った私たちは、こんばんは、と声をかけられた。弟妹と母親も一緒に昌子の浴衣姿が、乱れ飛ぶ螢の灯りではの見えるかと思いがう、夜の闇のな

かに白く浮き立っていた。

むろん、真昼の海辺で、私は真先に昌子たちのビーチパラソルをさがした。うかうかと二週間近くが過ぎた時、家からの電報が来た。北京にいる父親が帰国し、すぐ帰れというのだ。それが八月十八日のことであつた。二十四日の朝に、小田からの葉書を受取つた。彼等一家も昨日、東京へ引揚げてきたというのだ。その時、もう一度、上総湊へ引き帰そうと即座に決意した。――

今年（昭和四十六年）、例によつて上総湊を訪ねた私は、駅前不急斜面から海辺にかけて聳えた数少くない松の樹が、一本残らずなくなっていることに気づいた。駅員にきくと、昨年の秋、松喰い虫にやられて全部枯れてしまったという。戦後はじめてここへ戻つてきた時、太くなつてゐるそれらの松の幹に、戦争を差挟んで流れた歳月を、私はしっかりと感じたものであつた。だいたい上総湊の街のたたずまいはいまも余り變つてゐない。国道が舗装され、湊川にかかる湊橋が、国道を真直ぐ竹岡の方へ懸けかえられて、その道を烈しく疾走する車の数が激増したことを除けば、街自体はそれほど變つてゐない。まして、戦後最初に訪ねた時は、何も彼もがすっかり昔のままにあつた。廃墟と化した東京では、もはや、昔日を偲ぶ路地の小道一つ尋ねる術がなくなつてゐた私にとって、「第二の故郷」という言葉が、咄嗟に泛んできた。そして、何も彼も昔のままの上総湊で、駅前斜面の松の幹のどつしりと重みを増した姿だけが、十年という星霜を私に告げたのである。

人と別かるる一瞬の

思ひつめたる風景は

松の梢のてつべんに

海一寸に青みたり

単線の房総線で、上総湊駅は上下線の交換駅になっていた。佐貫町を発車した合図の信号が、駅舎のなかからカンカンと聞えてくると、木製の重いシグナルが、ガッタンと鈍い音を立てて下がる。と、反対側の海岸線に沿った岬の隧道を抜けて、玩具のように小さな汽車が、夕照のまだ消え残る空に、真黒な煙をさかんに吹きあげながら近づいて来るのだった。六時五十八分。足もとから昏れてゆくような薄い夕闇につつまれて、駅の木柵に妹と二人寄り添った教寄屋昌子が立っている。木柵の脇には、真赤なカンナの花が咲き乱れ、おしろい花が白く浮いていた。プラットホームから手を振る。妹も懸命に手を振っている。昌子は、ちょっと肯くように頸を軽く下げただけだ。松の梢の上から、木の間隠れに、晩夏の残照を浴びた海がキラキラ覗けて見える。佐藤春夫の詩が、思い泛ぶ。何と、そっくり似た風景ではないか……。

消^けなば消^いぬべき一沫^{いちまつ}の

海の雲より洩るやらむ、

焦點とほきわが耳は

人の嗚咽を空に聞く。

十日程したらまた北京へ戻る、その時、良ければ一緒に連れてってやる、と父はいう。夏休み

の猶予は、まだあった。私は迷っていたのだ。それが、二十四日に着いた小田からの葉書を見た瞬間、決心がきまった。数寄屋昌子を、私に紹介してくれたのは千夜子である。ところが、実をいえば、昌子へ心が傾くにつれて、千夜子の存在が、何か私に煩しかったのだ。監視されているように思われてならない。その千夜子たちは、もう東京へ帰ってきたという。二日でも三日でもいいや、せめて一日でも、昌子と二人で、思いきり泳ぎ、喋り、歩き廻り、それを残された最後の夏の幕切れとしたい。——一途な思いが、矢も楯もたまらず、私を上総湊へ呼び戻す。黄昏の田舎駅の木柵に、カンナやおしろい花と一緒にひっそりと佇んで、ただ一度、背くように、目顔の合図を送ってくれた昌子の面影が、臉から消えぬのであった。

——だが、この時、数寄屋昌子の姿は、もう上総湊の海辺になかったのである。

夏の畢り

いま、この稿を書きつぐうちに、昭和四十六年の十二月八日が、ひっそりと音もなく過ぎていった。「音もなく」といういい方はやや凡庸で陳腐だが、実際、そうとでもいうしかない程、その日は、格別の変哲もない日常の姿で過ぎ去っていった。今更のように、三十年という歳月が、却ってその物静かな日常性のなかで、私の骨身にこたえる。

ところで、そんな三十年も昔の思い出を、それもこれから追々明らかにされるような愚かな若き日の狂態を、人びとの嗤笑を覚悟で書いておこうと思ひ決めたのは、この思ひ出話には、不思

議とはつきりした日付がついていて、その日付のついた出来事と、私自身の思い出を重ね合わせてみれば、そこに、「戦争」を生きた世代の、何かひどくやりきれない実感が、脂汗といったように滲み出てくる気がするからだ。死んでしまった徳澄正の上にも、おそらく宅島徳光や和田稔や長門良知の上にも、似たような時間が、確かに流れ去っていたにちがいない、と考えれば、古い記憶を辿り、恥を忍んで「その頃」を語っておきたい技癢を覚えるのだ。

そこで第一番目の日付ということになるが、それは前に既に誌したとおり昭和十五年八月二十四日のことである。その朝、数寄屋昌子の姿を求めて、ふたたび上総湊へ引き帰してきた私は、海にも砂浜にも、彼女を見出すことができなかった。やがて海中に立てられた飛込台のところ、千夜子や昌子とおなじ女学校の仲間の一人から、昌子の家族が既に四日前に、東京へ引き上げていったと知らされるのだ。それは、先に私が上総湊を去ってから二日後、小田たちが東京へ引き上げた二日前のことなのであった。一家をあげて貸別荘に来ていた彼女の家族たちが帰京するとなれば、いくら避暑地の簡易生活とはいえ、引上げ仕度に一日はかかる。とすれば、私が上総湊を去った日、彼女たちの帰京は、もう既に決っていた筈だ。どうして、昌子は、あの別れの時にそのことを、私に告げてくれなかったのだろうか——実をいえば、この疑問が、その後の私の狂態に繋がる、いわばその発端となったといえよう。

ここで、三十年を隔てた日本の習俗の著しい相違をちょっと書き加えておかねばなるまい。というのとはかでもないが、その頃、若い男女の交際は、原則としてゆるされていなかったという

こと、だがそれも、高原や海辺の避暑先に限って大目に見られ、だからこそ、一と月、二月の夏を色彩する思い出は、一層鮮かに私たちの青春に刻印されもした、ということである。この「原則」がわかっていないと、やや大袈裟にいえば、昭和文学の理解がつかない。川端康成の小説であつたらうか、いや、あるいは堀辰雄か横光利一であつたか、秋風の立ちはじめた高原で、東京へ帰ってゆく少女の手紙を読む、そういう情景があつて、手紙には、「東京へ歸つたら、お目にかかれないと思ひます。私は忘れますが、あなたは憶えてゐて下さい」と書かれてある。誰の作品であつたか、作者の名も題名も忘れながら、この一節だけを忘れ得ないのは、嘗て、私たちにとつて「夏」とは、そういうものであつたから、そういう意味をもっていたからなのだ。女の方から住所を教え、帰つて後の再会を申出れば別、少なくとも男が先に、女の東京の住所を尋ねることはゆるされない、それは避暑地の「交際」のいわば規律違反なのであつた。翌年の夏、まためぐり逢えば、むろん親しい交際が復活した。めぐり逢わなければ、一夏の想い出とともに、それは消えてゆく。夏の畢りの駅頭に、私たちが佐藤春夫の「別離」を口ずさんで、その詩を絶唱と覺えたのも、こうしたあの頃の事情が介在していたからにはかならずぬ。

昌子の帰京を告げられた時、だから、私を襲つた喪失感、大都會の日常のなかに、ついに彼女を見失つてしまった、という鋭く胸にこたえる失望だつた。であればこそ、どうしてあの時……という疑問が、何度でも胸に立還ってくるのであつた。その疑問は、田舎駅の木柵のかたわらに佇んで、静かな微笑とともに、小首をかしげるように、目顔の合図を送っていた昌子の表情や

姿と、どうしても一致しなかった。私の心象の裡で一致しない、納得もできなかった。しかし、いずれにせよ、夏が畢ったこと、今年もまた夏の過ぎ去っていったということを、厭でも思い知らねばならなかった。

「夏逝き」という言葉が泛んで来る。夏は畢った、とくりかえしては心に眩き、吾れと吾が心に納得させながら、海から上った私は、もう東京へ帰ってゆくさえ億劫な気持で、潮に濡れたままの軀を、抛げ出すように浜茶屋の縁台におろした。六時五十八分の汽車で、今度はただひとり、誰に見送られることもなく、すごすごと帰らねばならぬと思えば、今更のように、昌子を追いかけてきた自分のこの未練な心が、うとましく思える。やはりあの時、昌子たちに送られて、夏の幕を閉じるべきだった、と悔やまれるのだ。と、その時、縁台の片隅に、無造作に疊まれた新聞の、四段抜きの大きな活字が、ふと眼に飛込んできた。一瞬、私は息を嚥み、あわただしくそれを取上げると読み下していった。

「新協」と「新築地」解散

当局の勧告で自発的に

左翼文化運動の一翼として結成され、その後幾多の変遷を経てなほ新劇運動の中心をなし、インテリ・プロレタリア層の観客を多数擁してゐる新協・新築地両劇団は、警視庁当局の自発的解散の懸念により新協劇団は二十二日、新築地劇団は二十三日、何れもその解散を決議して、新劇のために長き歴史を